

株式会社 プロテクトJ

防止柵販売・施工、個体数調整事業、野生鳥獣保護、有害鳥獣保護、ワナ猟具販売・施工 等

代表者名 代表取締役 石井 誠人

設立年月日 2013年(平成25年)4月1日

所在地 〒402-0056 山梨県都留市つる4-1-16

T E L 0554-45-1734

E-Mail info@protect-j.co.jp

業 種 製造業

従業員数 4人

F A X 0554-45-3006

U R L http://www.protect-j.co.jp

資本金額 300万円

インタビュー



代表取締役
石井 誠人

テーマ 高性能マット式センサーを用いた有害獣・多頭数捕獲設備の開発

有害獣を多頭数捕獲する設備に使用されるセンサーは、天候や気象状況により誤作動が発生すること多く、設置主体である地方自治体での「目的の捕獲数」を達成できないケースも多い。そこで、誤作動を起こさない「高性能マット式センサー」と「捕獲用檻」を組み合わせた捕獲設備を開発し、農村地域の有害獣被害の軽減を目指す。



センサーマット

農山漁村の過疎化や高齢化の進行により、耕作放棄地が増加している。里山・森林管理の粗放化、さらに少雪傾向など、こういった各地域の環境の変化によって、野生鳥獣被害が深刻化・広域化する背景となっている。さらにこの鳥獣被害により、農作業者の営農意欲を低下させ、耕作放棄地がより増加するといった悪循環を生む結果となっている。

また捕獲の担い手である狩猟免許所持者数は、減少傾向にあるとともに高齢化が進み、銃猟免許所持者数は大きく減少している。

野生の鳥獣による農作物の被害額は、年間200億円前後で推移している。このうち、8割を占めるシカとイノシシによる被害額が多い。被害額として数字に表れる以上に農村の暮らしと経済に深刻な影響を及ぼしている。

当社は鳥獣対策全般を業として、鳥獣保護・捕獲用フェンスの設置等、実績を上げてきた。その中で、有害獣の多頭数捕獲に使用されているセンサーカメラの誤作動により、目的の捕獲数を達成できない事例が多くある。これは各地方自治体や農業法人等で農作物被害から守るために、主に山間部で有害獣の多頭数捕獲のため設置する。センサーの感知により確認に行くと、柵内には捕獲されたはずの多頭数

有害獣が発見できないことが多くあった。

このシステムは、まず中に餌を仕掛けた柵を設け、ここに害獣が入ると入口のセンサーカメラが反応して柵の扉を下ろし捕獲する。目標は多頭数捕獲であるため、柵内に何頭かの害獣が入り込み、その出入りを確認しているのだが、実際に捕獲できない。この大型囲いワナのセンサーカメラに不具合があるということから原因究明をした結果、センサーの検知の方法として、入る有害獣に反応するが反面、外の仲間につられ逃げ出る有害獣も多くあり、結果、ゲートを閉めるタイミングを逃しているというもの。また、気象条件(霧・雨等)にも敏感に反応する場合があります、安定性に欠けている。

そこで、捕獲したい動物の重さに反応できる「マット式センサー」を開発することとなった。これは地中に高性能マット式センサーを埋め、感度を調整することにより、あらゆる大きさの獣類に向けた詳細な設定ができる。また、風雨等自然条件に伴う阻害要因を排除し、獣類のみ検知できる。また群れで行動する獣に対して、出口付近にマット式センサーを配置し、外に出ようとする行動を感知し素早くゲートを閉じるシステムにして、一度入った獣は絶対に逃がさない仕組みにする、というもの。

獣の習性も熟知した上で、より効果的な捕獲システムを安全で安定したものへと、さらに開発を進めている。



餌



センサーマット設置中

【対象類型】付加価値の向上：新規顧客層への展開 / 商圏の拡大 / 独自性・独創性の発揮 / ブランド力の強化 / 顧客満足度の向上
効率の向上：サービス提供プロセスの改善
【事業類型】一般型

平成 29 年度

狩ることよりも、動物を大切にしたい気持ちから始まった事業であった



捕らえた獣を個別化する檻

父親が趣味で狩猟をしていた。子供ながらに父親に付いて狩猟の場を体験しており、その面白さに心惹かれてもいた。野に山に、自然の中で大好きな犬を連れて歩き走り回る。獲物を仕留めるというよりも、自然の中で鳥も犬もそして自分も、共に走りながらの一体感が好きだった。

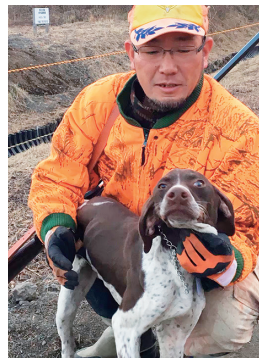
そんな中、地域交流も兼ねて自分自身も、平成元年には狩猟資格を取り、趣味の狩猟を始める事となる。元来、凝り性である。こだわることは緻密に考え、計画し対応するタイプ。狩猟の趣味にも熱が入

り、さらに山梨県猟友会東部支部で事務担当になった。

猟友会の事務局での仕事は7年間に及び、そこで、県や国での鳥獣害のことをあらためて詳しく知ることとなった。狩猟の世界でも、ハンターは高齢化し、若手ハンターは増えない。一方、地域の過疎と高齢化により、里山や森林管理のできない耕作放棄地が増え、それにともない野生鳥獣被害が深刻化・広域化していき、その捕獲の担い手である狩猟免許所持者数も、減少傾向の一途。有害鳥獣の捕獲要請が次々と伝えられる状況となってきたのだ。

「犬は、7頭飼っています。あとは、ネコと、ヤギは2頭、それからニワトリは20羽かな。」

狩りよりも、飼うこと。動物が大好きな石井社長。そこがこの仕事に入る原点となったようだ。



動物愛が石井社長の基本の姿

実は「いのち」のお話です。共にゆたかに暮らしていける日本の原風景を取り戻したい



ソーラーとシステム

このままでは日本の農林業が壊滅的な被害を受けることになる、と考え始めた。社会的・環境的な問題を背景とし、鳥獣対策全般を考えることを基盤とした会社を立てることとなった。

30年間の狩猟経験と鳥獣の生態系に詳しい強みをここに活かそうと決意したのだった。もともとの凝り性で、広い知識とワナの仕掛けや工夫することに対する自負もあった。家業の大転換である。

まずは、名刺配りの日々が始まる。そう、この仕事、対象はあくまで自治体や組合方面の方々。まずは自分を売り出すことに奔走する。「そういえば、こんな時はあの人に聞こう」の人となるため、多くの人たちと出会うことから始めたのだった。

「たぶん、この人は何をしているのだ、と家族には不振に思われていたかもしれませんね。」

それでも、初めに脚光を浴びた仕事は、太陽光発電所の外周フェンスを設置することだった。鳥獣の捕獲ではなく、鳥獣から施設を守るための設置。入

れるではなく、入れない仕事だったわけだが、山間部で人目から遠い場所は同じ事。他社より手頃に敷設できることで、多くの反響を得た。これは日本の北・青森から南・鹿児島まで、着実に施工実績を得られた。

そして根幹である鳥獣保護と捕獲用フェンスも、施工の確実性や安全性から高い評価を受けるようになってきている。

有害獣を多頭数捕獲という取り組みに、果敢に攻め実験と工夫が続いている。現場に小型ソーラーパネルを施設し、捕獲システムや通信に電力供給するような設備も進んでいる。

「大切なのは、共に生きている者たちのいのちの問題なんですよ。」

人間も動物も、共存して生きていける環境にたどり着いてほしいのだという。捕獲した獣を苦しめずに対処していくことも大切なこと。協力している大学やハンターの方たちとも力を合わせ、ほんとうの豊かな日本の在り方を考えている人かもしれない。



檻周辺